

2019年6月28日開催

第11回ワークショップ「地域主体の構想づくりとその実践

名古屋錦二丁目長者町地区のアートとエリアマネジメントを中心に」

講師 名畑恵氏

(NPO 法人まちの縁側育み隊代表理事/錦二丁目エリアマネジメント株式会社代表取締役)

1. 主旨

名古屋市の中心地にある繊維問屋街の長者町地区において、繊維業の衰退とともにまちも衰退した中、地域コミュニティが主体となりまちづくりが行われた。現在まちづくりのファシリテーターとして中心人物でもある「錦二丁目エリアマネジメント株式会社」代表取締役名畑氏によりコミュニティの形成とまちとアートの関りについてワークショップが行われた。

2.名古屋錦二丁目・長者町地区の概要

長者町地区は、名古屋城下において400年前の清州越し以来の商人の憧れの地だったが、繊維業の衰退とともにまちも衰退した。また、昼間人口が約2万人に対して夜間人口は約440人と、都心にあって限界集落的なまちである。

3.名古屋錦二丁目・長者町地区のまちづくり

地域主体の構想づくり（マスタープラン）をしながら多様な実践活動が行われ、同時に地域貢献型の再開発（エリアマネジメント）を仕掛けている。具体的な活動としては、2000年長者町協同組合主催の「長者町えびす祭り」においてシャッターイベントが企画され、現代的まちづくり活動が始まった。また2002年にはまちの有志たちが長者町街づくりカンパニーとして問屋ビルの再生をし、ファッション・デザイン・飲食店など街にふさわしい機能呼び込むエリアイノベーションが始まり、IT・デザイン・デジタルコンテンツ・大学呼び込むベンチャー向けオフィスを生み出した。さらに2004年には錦二丁目まちづくり協議会が設立され、町内会も産業組合も通りごとの集まりから面的にとらえるまちづくりができた。そして2008年以降はまちづくりの拠点として「錦二丁目まちの会所」がオープンされ、NPO法人まちの縁側育み隊が日常的なまちづくりの交流・活動を支える体制が生まれ現在に至っている。

4. まちづくりとアートのか関わり

長者町の衰退における一番の悩みは、次世代の跡継ぎや若者の無関心が挙げられ、その解決策としてマスタープランが作成され、2009年に開催された愛知トリエンナーレの会場になったことを契機にアート活動が盛んになり、若者のまちづくりの参画のきっかけとなった。また現代アートに対して当初地域の人の疑問もあったが、とりあえず受け入れてみようという地域性があり、製作プロセス重視型アートやキーパーソン発掘、アートの「面倒」が地域力を育み、そこから地域に根差した文化として、地域の個性ある風景を育み、クリエイティブ拠点の育成、コミュニティの形成に寄与している。

5. エリアマネジメントの意義

まちづくり構想を具現化するためには、しくみづくりが不可欠で、錦二丁目まちづくり協議会において活動の自立的発展と資金循環のしくみを検討するためエリアマネジメント部会が設立された。エリアマネジメントの包括的機能はキーパーソンを中心に多様な担い手が携わることで実現され、「コミュニティの場づくり」「公共空間の活用と維持管理」「既存空間のリノベーション支援」「コミュニティ支援」を主な事業として掲げて2018年に「錦二丁目エリアマネジメント株式会社」が発展的に設立された。錦二丁目地区では、江戸時代から継承してきている「会所」を地域固有の特性としてとらえ、「錦二丁目まちなかの会所」を運営し「会所のネットワーク化」を提起している。こうした「空間」「時間」「仲間」の3つの間を共有する中で、地域の人が主体となり、NPO、大学が時に伴走者、時に後方支援という形で行政との信頼関係を構築しながら名古屋市全体の地域まちづくりを牽引していく存在になった。

6. 名古屋錦二丁目・長者町地区の今後について

根本的な課題として町内会の担い手不足、繊維業の廃業による会員不足、ボランティア有志による活動の限界、まちづくりの推進者の不足に直面しており、その課題を解決するためエリアマネジメント株式会社が公共空間を活用した「まちなかのしゃべりば」「環境アカデミー」などのオープンな学びの場の開催や地道な活動として長者町カルタづくりやワークショップなど、一人一人が思いや意思を表現するしくみづくりを多様に仕掛けており、コミュニティ再編を目指している。

7. 今回のワークショップについて

今回のワークショップのまとめとして「まちとアートの出会いのポイント3か条」についてグループ内のワークショップが行われたが、各チームの発表をまとめると「まちづかいへ」という言葉が生まれた。長者町地区においても当時小学生だった子供が中学生になると中学まちづくり隊となり、そして今はまちづくりの担い手を目指した大学受験生になっており、まさにアートがきっかけで、ひとりひとりの愛着とまちなかの体系が **Belonging** という形でまちなかの価値や課題を共有し「まちづくり」が「まち育て」、そして「まちづかい」へ変化への対応をしていることを感じる機会となった。

※まちづかい：【ま】3つの間（時間・空間・仲間）、【ち】地域の発意、行政・専門家支援、【づ】ずっと大切にしたいものを自分たちで見つける、【か】価値を掘り起こして、育てる視点を（地域ソース）、【い】意表をつく、面倒なことがアートのまちなかの展開の価値、【へ】変化に対応できるしなやかさをつける（～しくみ）＝エリアマネジメント

以上

※参考 名畑恵著〔2019〕錦二丁目・長者町地区のまちづくりレジメ

吉田隆之著〔2015〕トリエンナーレはなにをめざすのか（水曜社）

議事録レポート担当： 都市政策・地域経済コース

M19AA504 川口晃慶